



蘇る一瞬 みとよ写真帳 page 67

このコーナーは、文書館に保存している古い写真を皆さんに紹介します。



懐かしの1枚
大辻の鋳造業
昭和7(1932)年頃
山本町

山本町における鋳造業は、寛永年間(1624~1644年)に近江国(滋賀県)の鋳物師が大辻に定住し、鋳物業を営んだのが起源とされている。鋳物師辻と呼ばれる大辻の2つの鋳物会社とその伝統を維持しており、昭和45(1970)年に山本町指定無形文化財(現在は三豊市指定無形文化財)に指定されている。

※文書館では、まちの風景や催事などの古い写真を収集しています。原本はお返ししますので、情報の提供をお願いします。〔文書館 ☎63・1010〕

「思い出の1ページ」

「この写真は、山本町の薬王寺の釣り鐘を造った時の写真ですね。私の父が保管していたものです。椅子に座っている2人は、釣り鐘の寄贈者だと思われます」と話すのは、金安鋳造の9代目代表取締役である原三英さん(66)。

「鋳物師辻」という言葉があるように、辻では昔から鋳物業が盛んでした。昭和40年くらいまでは、鋤などの農具や、風呂釜・鍋といった家庭鋳物が主に造られていました」と原さん。

「金属を溶かすためには強い火力が必要です。そのために、昔は、タタラと呼ばれる送風器を使って溶鉱炉の中に風を送り込んでいたと聞いています。タタラは鋳物の原点ですね。当時使われていたタタラ板は今も保管されています」

『新修 山本町誌』によると、タタラは大正末期まで使われていたと書かれています。

「子どものときは、よく父が働く現場を見に行っていました。昔は手作業が多かったので、注湯という溶けた金属を型に流し入れる工程が始まるのが夕方になることが多くてね。外で作業しているところを、晩御飯を食べた近所の人たちが見に来ていました。赤白くなった金属



▲農具の型に注湯している様子

が流されていくのを見て、夜までわいわい賑やかでしたよ。今は機械化が進んで、作業もだいぶ楽になりました」と幼少期の思い出を話してくれました。現在は、船や製紙機械・農機のエンジン部品などの生産が大半だそうです。鋳物は、時代を超えた今も、さまざまな形で私たちの生活を支えてくれています。

編集 後記



今月号の特集は、コミュニティバス。市内を車で走りながら改めて対向車線に目をやると、色とりどりのコミュニティバスが走っていますね。

それでは乗ってみようと、よく晴れた、ある土曜の屋下がり、時刻表片手に荘内半島をぐるっと回ってみました。海岸線を走るバスに揺られ、山の緑と海と島々に、心も身体もリフレッシュ。たまにはバスで三豊の良いところを発見してみませんか？